

ナックル☆ブレーカー

HIRO

ラコネシア大陸の北東部にある広大な『レイラードの森』の中、ランバルドは大木の根に腰かけて革袋の飲み口を開けた。

口を革袋の飲み口につけて傾けるが、中に入っているはずの水が流れて来ない。

不審に思ったランバルドが革袋を覗くと、水は一滴も入っていなかった。

飲み口を下にして振ってみるが、やはり水はでてこない。

そういえば、数時間前に休憩した時飲みきってしまった。

ランバルドは諦めてその革袋を置くと、荷物袋に手を伸ばした。

手先の感覚でパンや干し肉が入っているのは分かったが、水が入っている革袋は無い。

どうやら、水は全て飲みきってしまったようだ。

ここ数日、この蒸し暑い森にいたせいで、いつもより多く水を消費してしまったらしい。

食料だけあったとしても、水分を取れなければ死んでしまう。

周囲に水が流れる音はしないが、探さなければ。

ランバルドは立ち上がると、

背中を預けている大木の枝目掛けてジャンプした。

今年18になったばかりで細身なランバルドが、
大男なら三人まとめて飛び越えられそうなほど高く飛翔する。

楽々木の枝に飛び乗り、
手をひさしにして周囲の様子を伺った。

すると、
ここからそう遠くない所に集落が見える。

家が立ち並び、
煙りが幾筋も上っているところから、
人もすんでいるようだ。

これなら水も、
ついでに減ってきた食料も補給できる。

「よっと」

木からランバルドは飛び降り、
地面に軟着陸した。

置いていた荷物袋を掴み、
肩にかける。

中には明かり用の油や多種多様な食料が詰め込まれているので、
童子一人分くらいの重さが肩にかかった。

そこそこ重いが、
バランスを崩す程ではない。

ランバルドは先程見えた村を目指して歩きはじめた。

ヒユナが目覚めると、

うつ伏せに木製の床を眺めていた。

左を見ると、
左手が木製の板に挟まれるようにして拘束されている。

頭を動かそうにも首から上が動かせないので、
どうやら首枷をされているようだ。

首枷をされてひざまずいている状態で、
全く身動きが取れなかった。

「此の者は王を愚弄した！
よって、血の粛清を！」

ヒュナの右側から、
ひび割れた女性の声が響いた。

そちらに顔を向けると、
髪に白いものが混じった修道服の中年シスターが、
叫んでいる。

その声に合わせてかのように、
地響きのような怒号が鳴った。

首をぐいとあげて前を見ると、
数えきれないほどの群衆が、
口ぐちに何かを叫んでいる。

群衆は一段低い位置にいて、
ヒュナ達はどうやら処刑場のような高い位置にいるようだ。